

## 植生

植物群落とは、様々な植物が一緒に生育し集団を形成することで成り立つ植物の群れで、植物群落を構成する植物種の組み合わせ（種組成）から様々なタイプに分けることができます。植物群落の分布は生育場所の環境要因（気温、降水量、土壌、地質、人為、動物による採食など）に大きく影響を受けます。

北は日本海から、南は瀬戸内海・太平洋に面し、土地の起伏に富む多様な環境を有する兵庫県には、少なくとも 157 のタイプの多種多様な群落が分布しています。植物群落を人為の影響度によって、自然植生（人の影響をほとんど受けていないもの）、代償植生（伐採などの人の影響を強く受けているもの）、人工植生（植林など人が創出したもの）に大別したとき、本県には自然植生は 102 タイプ、代償植生は 41 タイプ、人工植生は 14 タイプありますが、面積の割合でみると自然植生は 3 %、代償植生は 61%、人工植生は 36%と、ほとんどが人の影響を強く受けた植物群落で占められ、自然植生はほとんどないことがわかります。

このため、自然植生の多くは、兵庫県レッドデータブック 2003 において貴重な自然としてあげられています。掲載されている自然植生のうち約 1/3 は照葉樹林で、その大半は社寺や仏閣に残る「社寺林」であることから、自然植生の保全には私たちの文化が極めて大きな役割を果たしていることが分かります。このほかの自然植生としては、氷ノ山地域の南部に主に分布するモミ - ツガ林や日本海側に残存するアスナロ林などの針葉樹林、県北西部に主に分布するイヌブナ林や日本海側の海岸風衝地に残存するカシワ林、氷ノ山地域の高標高域のブナ林、渓谷に分布するシオジ林やトチノキ林などの夏緑林があります。

湿原植生としては、低地に分布し泥炭堆積のないサギソウ、トキソウなどを含む中間湿原と、ミズゴケ類やヤマドリゼンマイを伴った高層湿原があり、前者は播磨・阪神地域に多くみられ、後者は主に氷ノ山地域に分布しています。

また、池沼植生の多くは播磨東部のため池地域に、コウボウムギ群落などの海浜植生は海岸砂丘が残る日本海や淡路島の海岸に、シバナ群落などの塩湿地植生は改変の少ない河口が残る播磨地域や但馬地域にみられます。

代償植生の大半は、アカマツ林やコナラ林、ミズナラ林などの主に薪炭林として利用されてきた里山林で、気候の影響により北部と南部

のものでは種組成が異なっています。また、砥峰高原や鉢伏高原などの火入れや草刈りによって維持されるススキ草原や、畦畔や河川の法面に広がるチガヤ草原などの草原植生があります。いずれも現在ではほとんど利用されなくなり、秋の七種などのかつて身近であった植物が失われつつあり、生物多様性の低下が懸念される植生です。

人工植生については、その97%が木材生産を目的としたスギ-ヒノキ林で県全域にみられますが、特に西播磨地域や但馬・丹波地域にて広い面積で分布しています。このほか、同じく木材生産を目的としたカラマツ林やテーダーマツ林のほか、砂防や防風など防災を目的としたクロマツ林やオオバヤシャブシ林、ニセアカシア林、筍や竹材の生産を目的としたモウソウチクやマダケからなる竹林などが各地で見られます。